

ターミナルケアの授業における学生の死生観に関する検討

園田麻利子, 上原 充世

要 旨

本学看護学科3年次生に開講されているターミナルケアの授業を通して学生の死生観の変化を明らかにし今後の教育の方向性を模索することを目的に授業前後で質問紙による調査をした。対象は、本学看護学科3年次生、50名であり、期間は平成18年4月、7月の2回である。

その結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 死別体験、葬儀参列の体験が8~9割があり体験率は高いと言えた。
- 2) 死に対する態度の尺度、死生観尺度、死のイメージ尺度 (SD法) の授業前後の比較では授業後が有意に高かった。このことから、授業は学生の死生観が肯定的に変化することに大きな意義を持っていたと考えられた。
- 3) 死別体験・葬儀参列の体験・看取り体験と各尺度との関連は一部を除いて有意差はなかった。このことから看護学生の死生観を形成する上でこれらの体験は大きな影響を及ぼしていないと考えられた。
- 4) 授業は、専門の講師からの講義や学生が自ら死について考えられるような教材であったが、授業後においても死を否定的に考える学生もいるので今後の授業内容の検討が必要であると考えられた。

今回の調査より、ターミナルケアの授業は、学生の肯定的な死生観育成に大きな影響を及ぼしていた。しかし、授業後においても死を否定的に捉える学生はいるので、授業のあり方の継続的な検討が示唆された。

キーワード：看護学生、死生観、ターミナルケア、看護教育

1. はじめに

人間の死生観は生まれ育った文化や習慣など、周囲の環境に大きく影響を受けることはよく知られている¹⁾。しかし近年、核家族の増大、医療技術の進歩に伴う施設内の死などの増加によって、死が家庭から切り離され、学生が死を身近なものとして体験する機会が少なくなっている。また、少子化に伴い兄弟や姉妹の誕生を経験する機会にも恵まれていない。つまり、死や生が施設内で実施される

ことにより、学生がそのことを日常的に触れ体験する機会が乏しくなり、死や生に関しての体験を通して死生観を育成するには厳しい現状があると言える。

看護学生は、将来看護者となるため人間として生きることや死の意味を探求し、患者・家族が尊厳ある死を迎えられるように援助できることを求められている。そのため人生観・死生観を養うことが必要である。しかし、一般の学生と同様に人の死に直面する機会はほとんどなく、死は非日常的な出来事であると言える。

山本は、看護師の死生観が未完成のうちに他者の死に直面した場合、どう受け止めてよいか分からず、混乱に陥ったり、燃え尽き状態になったりすることが少なくない²⁾。また、岡本は、死への恐怖は、患者からの逃避になり、終末期患者に向き合い、最期の時を支えるケアを行うことができなくなると考えられ、そのため終末期ケアを行う看護師は死生観を持つことが必要となる³⁾と述べている。このことは、患者をケアするにあたり看護師自身の死生観の重要性を語っている。

そこで、将来看護師となる看護学生に対しても学生である基礎教育の時代から死生観の育成に対する教育が必要であると言える。豊田らは看護学生の死生観を培っていくためには、段階的な教育の必要性がある。また、1997年にカリキュラムが改正され各看護学校独自のカリキュラムが構築されてきた⁴⁾と述べている。

本学は開学1994年よりターミナルケアという授業を看護学科3年次生の実習前の前期に開講している。この授業の目的は、3年前期において看護学の基礎的領域を終えるにあたり、人生の最終であるターミナルの時期のケアという看護の原点と言っても過言ではない援助を学習することによって死を恐れることなく死生観を豊かにし、実習で患者様のケアが実践できる。また、そのことを通して今後の看護観の育成へとつなげるということである。

そこで、本研究の目的は、ターミナルケアの授業を通して看護学生の死生観の変化を明らかにし今後の教育の方向性を模索することである。

II. 研究方法

1. 対象：本学3年次生に開講されているターミナルケアの授業を受講し、本研究に承諾を得られた学生50名。
2. 調査期間：平成18年4月、平成18年7月の2回。
3. 方法：「ターミナル」授業開講時の4月と終了時の7月の2回、質問紙を配布し無記名で回答してもらい授業終了後に回収した。
4. 調査項目：調査項目は、以下の学生の基本属性、尺度から構成される。

1) 学生の基本属性

年齢、死別体験の有無、誰の死別体験か、葬儀の参列体験の有無、誰の葬儀参列体験か、看取りの体験の有無、誰の看取り体験か、自分の死についての考え（5件法）、死後の世界の有無（3件法）、死後の世界のイメージ、死について語りあう頻度（5件法）、死について語り合う相手、余生の過ごし方である。

2) 死に対する態度尺度（1975年）

ディル・V・ハート（Hardt, DV）により考案された死に対する態度を明確にするために20項目の質問で構成されている。死を肯定的に受け止めているのか、否定的に受け止めているのかを得点化（1.1～4.9）する。得点が2.9以下の人は、死を否定的に受け止めている傾向があり、得点が3.0以上の人は、死を肯定的に受け止めている傾向がある。

3) 臨老式死生観尺度（1999年）

平井等によって考案された日本人の死生観を明確にするものであり、I. 死後の世界観、II. 死への恐怖・不安、III. 解放としての死、IV. 死からの回避、V. 人生における目的意識、VI. 死への関心、VII. 寿命観の7因子27項目により構成されている。7件法で回答する。I. 死後の世界観は、得点が高い方が死

後の世界や靈魂観念を信じる傾向がある。Ⅱ. 死への恐怖・不安は、得点が高い方が死を恐怖や不安と捉える傾向がある。Ⅲ. 解放としての死は、得点が高い方が死を痛みや苦しみからの解放と捉える傾向がある。Ⅳ. 死からの回避は、得点が高い方が死を考えることを避ける傾向にある。Ⅴ. 人生における目的意識は、得点が高い方が人生を肯定的に捉える傾向にある。Ⅵ. 死への関心は、得点が高い方が死に関心を持ち死について考える傾向がある。Ⅶ. 寿命観は、得点が高い方が人の生死への目にみえない力の関与すら信じる傾向がある。日本人の死生観の考察に使用され、信頼性・妥当性ともに検証されている⁵⁾。

4) 死のイメージ尺度 (SD法)

SD法は、C.E オスグッドらが考案した測定法で、ある概念が意味する内容を客観的計量的にとらえる。特に色彩、音色、手ざわりといった感覚的刺激によって引き起こされるイメージなど、複数の要因によって構成されるものを定量化することができる。これを用いて17項目からなる形容詞対を構成し、それぞれ7件法で回答した。

5. 分析方法

分析にはSPSS12.0Jを使用し、有意水準5%で有意差ありとした。

1) 各尺度の信頼性の検討

各尺度の内的信頼性について、クロンバッハの α 係数による検討を行った。

2) 学生の基本属性の検討

記述統計で検討を行った。

3) 授業前後における死生観の変化の検討

授業前後における基本属性の一部である死に対する考え方、各尺度得点の変動について対応のあるt検定を用いて検討した。

4) 基本属性と各尺度得点の変化の検討

授業前後における基本属性の一部と各尺度との関係について分散分析を用いて検討した。

6. 倫理的配慮

学生には、研究の趣旨を説明し協力をもとめた。質問紙は無記名で個人が特定されないこと、学習成績とは無関係であることを口答と文書で伝え、了承を得た。

Ⅲ. 結 果

回収された調査票数と回収率は、授業前は50人中50人(100%)であり、授業後は48人中47人(97.8%)であった。

1. 各尺度の信頼性について

各尺度の信頼性について検討した。授業前後で行った調査における信頼係数はそれぞれ、死生観尺度は授業前が.67、授業後が.73、死のイメージ尺度では、授業前が.81、授業後が.89であり、内的整合性が得られていた。

2. 学生の基本属性について

平均年齢は20.3~20.7歳であった。

(表1-①)

死別体験の有無では42人(84.0%)が体験をもっていた。その体験は複数回答であるが、祖父母が28人(47.5%)と最も多く、親戚(叔父・叔母・従兄弟を含む)16人(27.1%)、知人・友人が各々6人(10.2%)の順であった。(表1-②)

葬儀の参列の有無では47人(94.0%)が体験していた。その体験は複数回答であるが、祖父母が27人(45.0%)と最も多く、親戚(叔父・叔母・従兄弟を含む)が20人(33.3%)、友人が7人(11.7%)の順であった。

(表1-③)

看取り体験の有無では、18人(36.0%)が体験していた。その体験は複数回答であるが、祖父母が16人(84.2%)で最も多く、ペット

表1 対象者の基本属性(1)

① 対象者の平均年齢と各体験の有無
(N=50(%))

	有	無
年齢の平均値	20.3~20.7	
死別体験の有無	42 (84.0)	8 (16.0)
葬儀参列の有無	47 (94.0)	3 (6.0)
看取り体験の有無	18 (36.0)	32 (64.0)

② 誰の死別体験

(1)-① 死別体験の有無で
「有」と回答した人(複数回答)
(N=41(%))

祖父母	28 (47.5)
親 戚	16 (27.1)
知 人	6 (10.2)
友 人	6 (10.2)
ペット	2 (3.3)
父	1 (1.7)

③ 誰の葬儀参列体験

(1)-① 1 葬儀参列体験の有無で
「有」と回答した人(複数回答)
(N=46(%))

祖父母	27 (45.0)
親 戚	20 (33.3)
友 人	7 (11.7)
知 人	3 (5.0)
いろいろな人	2 (2.9)
父	1 (1.7)

④ 誰の看取り体験

(1)-① 看取り体験の有無で
「有」と回答した人(複数回答)
(N=18(%))

祖父母	16 (84.2)
親 戚	1 (5.3)
ペット	2 (10.5)

2匹(10.5%), 親戚1人(5.3%)の順であった。(表1-④)

自分の死について考えたことがあるかという問いに対して、授業前では、よくある9人(18.4%), 時々ある27人(55.1%)であったが、授業後には、よくある11人(22.9%), 時々ある32人(66.7%)であり、よくある・時々あるが、36人より43人に増加した。また、授業前には、ほとんどない10人(20.4%), ない2人(4.1%)であったが、授業後には、ほとんどない4人(8.3%), ない1人(2.1%)であり、ほとんどない・ないが12人より5人に減少した。(表2-①)

死後の世界の有無についての問いに対しては、授業前では、ある27人(54.0%)であり、授業後では、ある37人(77.1%)に増加した。また、ない1人(2.0%)と答えた人は、授業前後で変わらなかった。(表2-②)

死後の世界の有無で「ある」と回答した人に関する死後の世界のイメージについての問いに対しては、授業前には、明るい15人(55.6%)であり、授業後には、明るい24人(66.7%)と増加した。暗い・不気味と答えた人は授業前にはいなかったが、授業後は1人(2.8%)いた。(表2-③)

死について語り合う頻度については、授業前はよくある4人(8.0%), 時々ある26人(52.0%)であったが、授業後は、よくある8人(17.0%), 時々ある19人(40.4%)であり、よくある・時々あるが、30人より27人と減少した。また、授業前は、ほとんどない16人(32.0%), ない4人(8.0%)であったが、授業後は、ほとんどない19人(40.4%), ない1人(2.1%)であり変化はなかった。授業前後で死について話したくないと回答した者はいなかった。(表2-④)

死について語り合う頻度が「よくある・時々ある」と回答した人の語り合う相手は、複数回答であるが、授業前は友人20人(50.0%)が最も多く、家族10人(25.0%)、父母8人(20.0%)の順であった。授業後も友人20人(55.6%)が高く、父母9人(25.0%)、家族3人(8.3%)と変化はみられなかった。

(表2-⑤)

自分の命が6ヶ月しかないと仮定した場合、どのような余生を送りたいかという問いに対

表2 対象者の基本属性(2)

① 自分の死についての考え

	授業前 (N=49(%))	授業後 (N=48(%))
よくある	9 (18.4)	11 (22.9)
時々ある	27 (55.1)	32 (66.7)
ほとんどない	10 (20.4)	4 (8.3)
ない	2 (4.1)	1 (2.1)
考えたくない	1 (2.0)	0 (0)

② 死後の世界の有無

	授業前 (N=50(%))	授業後 (N=48(%))
ある	27 (54.0)	37 (77.1)
ない	1 (2.0)	1 (2.1)
わからない	22 (44.0)	10 (20.8)

③ 死後の世界のイメージ

((2)-② 死後の世界の有無で「ある」と回答した人)

	授業前 (N=27(%))	授業後 (N=36(%))
明るい	15 (55.6)	24 (66.7)
暗い	0 (0)	1 (2.8)
不気味	0 (0)	0 (0)
今の世界と同じ	6 (22.2)	6 (16.7)
わからない	6 (22.2)	5 (13.9)

しては、授業前は、両親などに感謝したい28人(58.3%)が最も高く、残された生活をエンジョイしたい10人(20.8%)、この若さで死ぬことは考えられない、慰めて欲しいが3人(6.3%)であった。授業後も両親などに感謝したい32人(71.1%)が最も高く、残された生活をエンジョイしたい7人(15.6%)、身の回りの整理をしておきたい3人(6.7%)の順であった。(表2-⑥)

3. 授業前後の学習効果について

1) 授業前後での平均値の差の検討

授業による学習効果に関しては、授業前後での変化について以下の内容で記述統計、平均値の差を対応のあるt検定で行った。基本属性の中で、自分の死についての考え(5件

④ 死について語り合う頻度

	授業前 (N=50(%))	授業後 (N=47(%))
よくある	4 (8.0)	8 (17.0)
時々ある	26 (52.0)	19 (40.4)
ほとんどない	16 (32.0)	19 (40.4)
ない	4 (8.0)	1 (2.1)
死について話したくない	0 (0)	0 (0)

⑤ 死について語り合う相手

((2)-④死について語り合う頻度で

「よくある」「時々ある」と回答した人(複数回答))

	授業前 (N=30(%))	授業後 (N=25(%))
友人	20 (50.0)	20 (55.6)
家族	10 (25.0)	3 (8.3)
父母	8 (20.0)	9 (25.0)
牧師	1 (2.5)	0 (0)
親戚	1 (2.5)	0 (0)
兄妹	0 (0)	1 (2.8)
大切な人	0 (0)	2 (5.6)
誰でも	0 (0)	1 (2.8)

⑥ どのような余生を送りたいか

	授業前 (N=48(%))	授業後 (N=45(%))
育ててくれた両親や世話になった人々に感謝の気持ちを何らかの形で表してから死にたい。	28 (58.3)	32 (71.1)
思い切り遊んだり, 旅行したり, 美味しいものを食べたり, 残された生活をエンジョイしたい。	10 (20.8)	7 (15.6)
この若さで死ぬなんてとても考えられない。その日まで誰かに支えられ, 慰めてもらいたい。	3 (6.3)	1 (2.2)
今までの残された課題をやりとげたい。	1 (2.1)	1 (2.2)
どうしてよいか分からないので今までの生活をそのまま続ける。	1 (2.1)	0 (0)
困っている人や助けを求めている人に自分なりにできることをやってみたい。	1 (2.1)	0 (0)
自分の部屋は日記など身の回りの整理をしておきたい。	1 (2.1)	3 (6.7)
その他	3 (6.3)	1 (2.2)

法), 死後の世界の有無 (3件法), 死についての語りあう頻度 (5件法), 各尺度「死に対する態度尺度」「臨老式死生観尺度」「死のイメージ尺度 (SD法)」について検討を行った。

(1) 基本属性について

自分の死についての考えについては, 授業前は 2.96 ± 0.80 , 授業後は 3.10 ± 0.63 であり, 授業後の得点が高かったが, 対応のあるt検定では有意差は認められなかった ($t(47)=1.10$, $p>.05$)。 (表3(1))

死後の世界の有無については, 授業前が 2.54 ± 0.54 , 授業後が 2.75 ± 0.48 であり, 授業後の得点が高かったが, 対応のあるt検定では有意差は認められなかった ($t(47)=1.75$,

$p>.05$)。 (表3(2))

死についての語り合う頻度については, 授業前は 2.58 ± 0.77 , 授業後は 2.71 ± 0.77 であり, 授業後の得点が高かったが, 対応のあるt検定では有意差は認められなかった ($t(47)=.80$, $p>.05$)。 (表3(3))

(2) 死に対する態度の尺度

死に対する態度の尺度は, 授業前は 2.61 ± 0.49 , 授業後は 2.99 ± 0.49 であり, 対応のあるt検定では授業後が有意に高かった ($t(46)=3.94$, $p<.01$)。 (表3(4))。ハートが死に対して肯定的な態度としている得点が3.0以上の者は, 授業前後で11人から27人に増加した。3.0未満の者は37人から21人に減少した。

表3 授業前後での平均値の差の比較

(1) 自分の死についての考え

	授業前(N=48)	授業後(N=48)	t 値
平均値±SD	2.96±0.80	3.10±0.63	t(47)=1.10

(2) 死後の世界の有無

	授業前(N=48)	授業後(N=48)	t 値
平均値±SD	2.54±0.54	2.75±0.48	t(47)=1.75

(3) 死について語り合う頻度

	授業前(N=48)	授業後(N=48)	t 値
平均値±SD	2.58±0.77	2.71±0.77	t(47)=.80

(4) 死に対する態度尺度

	授業前(N=47)	授業後(N=47)	t 値
平均値±SD	2.61±0.49	2.99±0.49	t(46)=3.94*

* p<0.01

(5) 死生観尺度

	授業前(N=50) 平均値±SD	授業後(N=48) 平均値±SD	t 値
I 死後の世界観	5.24±1.47	5.48±1.47	t(190)=1.55
II 死への恐怖・不安	4.44±1.95	3.87±1.76	t(191)=3.41*
III 解放としての死	3.28±1.69	3.85±1.68	t(189)=3.57*
IV 死からの回避	2.27±1.35	2.24±1.41	t(189)=0.23
V 人生における目的意識	3.75±1.70	4.36±1.50	t(188)=4.03*
VI 死への関心	4.26±1.94	4.46±1.87	t(190)=0.99
VII 寿命観	4.48±1.92	4.93±1.50	t(142)=2.23

* p<0.05

(3) 死生観尺度

臨老式死生観においては、授業前後の各因子では、I. 死後の世界観は、授業前は5.24±1.47、授業後は5.48±1.47、II. 死への恐怖・不安は、授業前は4.44±1.95、授業後は

3.87±1.76、III. 解放としての死は、授業前は3.28±1.69、授業後は3.85±1.68、IV. 死からの回避は、授業前は2.27±1.35、授業後は2.24±1.41、V. 人生における目的意識では、授業前は3.75±1.70、授業後は4.36±1.50、

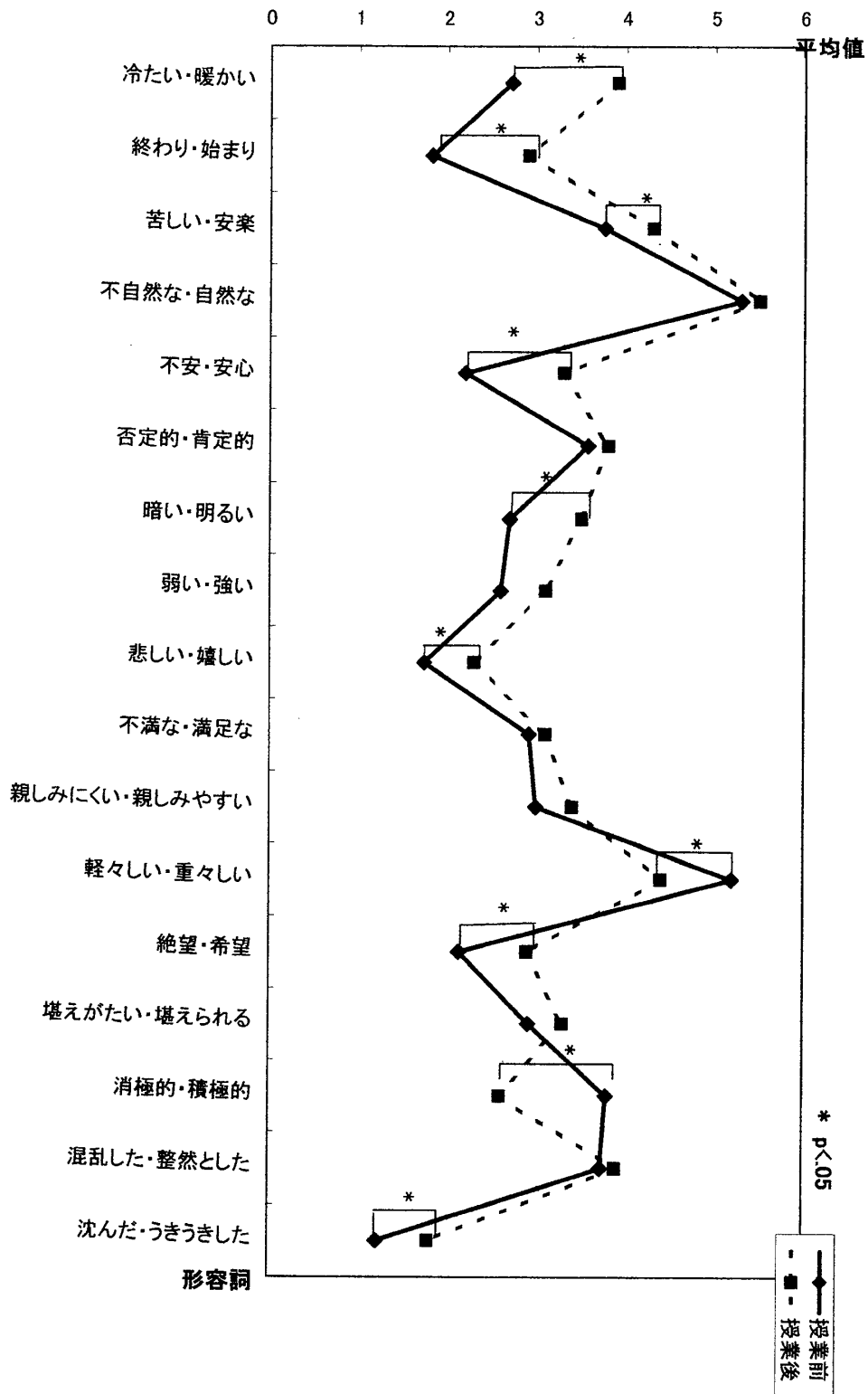


図1 授業前後での平均値の差の比較 (死のイメージ)

VI. 死への関心では、授業前は 4.26 ± 1.94 、授業後は 4.46 ± 1.87 、VII. 寿命観では、授業前は 4.48 ± 1.92 、授業後は 4.93 ± 1.50 であった。II・IVでは授業後の得点が低かったが、それ以外では授業後の得点が高かった。授業前後の変化を対応のある対応のあるt検定で比較してみたところ、以下の3項目で有意な差がみられた。II. 死への恐怖・不安の得点が有意に低くなり ($t(191) = 3.41, p < .05$)、III. 開放としての死 ($t(189) = 3.57, p < .05$)、V. 人生における目的意識 ($t(188) = 4.03, p < .05$) が有意に高かった (表3(5))。

(4) 死のイメージ尺度

死のイメージ尺度においては、授業前後で17項目中の「軽々しい・重々しい」と「消極的・積極的」の2項目が授業前に高かったが、それ以外の項目では授業後の得点が高かった。対応のあるt検定においては「軽々しい・重々

しい」($t(46) = 4.73, p < .01$)、「消極的・積極的」($t(46) = 4.35, p < .01$)において授業前が有意に高く、「冷たい・暖かい」($t(46) = 4.99, p < .01$)、「終わり・始まり」($t(47) = 3.24, p < .01$)、「苦しい・安楽」($t(47) = 2.03, p < .01$)、「不安・安心」($t(47) = 4.64, p < .01$)、「暗い・明るい」($t(46) = 4.10, p < .01$)、「悲しい・嬉しい」($t(46) = 3.15, p < .01$)、「絶望・希望」($t(45) = 3.35, p < .01$)、「沈んだ・うきうきした」($t(46) = 2.77, p < .01$)では授業後が有意に高かった (図1)。

2) 基本属性と各尺度との関連

基本属性と死に対する態度・死生観尺度との関連をみるため、死別体験の有無、葬儀参列の有無、看取り体験の有無を独立変数に、死に対する態度、死生観尺度を従属変数として分散分析を行った。

(1) 死別体験の有無と死に対する態度・死生観

表4 基本属性と死に対する態度・死生観尺度との関連

(1) 死別体験の有無と死に対する態度・死生観尺度との関連

	死別体験		F値
	有(平均値±SD)	無(平均値±SD)	
死に対する態度	授業前	2.64 ± 0.48	$F(1,46) = 1.79$
	授業後	3.01 ± 0.49	$F(1,46) = 0.42$
死生観尺度 I (授業前)	II (授業前)	5.48 ± 1.57	$F(1,47) = 1.46$
	III (授業前)	5.29 ± 1.79	$F(1,48) = 0.25$
	IV (授業前)	3.45 ± 1.99	$F(1,48) = 1.67$
	V (授業前)	2.33 ± 1.48	$F(1,48) = 4.33 *$
	VI (授業前)	3.86 ± 1.72	$F(1,48) = 1.67$
	VII (授業前)	4.58 ± 2.01	$F(1,41) = 0.03$
	VIII (授業前)	4.75 ± 2.00	$F(1,41) = 1.14$
死生観尺度 I (授業後)	II (授業後)	5.88 ± 1.38	$F(1,48) = 2.17$
	III (授業後)	4.69 ± 1.60	$F(1,48) = 0.09$
	IV (授業後)	4.94 ± 1.57	$F(1,48) = 0.65$
	V (授業後)	3.95 ± 1.82	$F(1,48) = 1.05$
	VI (授業後)	2.31 ± 1.39	$F(1,47) = 0.34$
	VII (授業後)	3.90 ± 1.50	$F(1,41) = 0.05$
	VIII (授業後)	4.75 ± 2.00	$F(1,41) = 0.31$

* $p < 0.05$

(2) 葬儀参列体験の有無と死に対する態度・死生観尺度との関連

	葬儀体験 有(平均値±SD)	(N=48) 無(平均値±SD)	F値
死に対する態度 授業前	2.61±0.49	2.40±0.71	F(1,46)=0.33
授業後	2.99±0.50	3.06±0.17	F(1,46)=0.06
死生観尺度 I (授業前)	5.43±1.50	4.33±2.31	F(1,47)=1.43
II (授業前)	5.45±1.61	3.67±3.06	F(1,48)=3.10
III (授業前)	3.38±1.92	2.00±1.73	F(1,48)=1.48
IV (授業前)	2.51±1.52	2.67±1.53	F(1,48)=0.03
V (授業前)	3.68±1.70	4.33±2.52	F(1,48)=0.40
VI (授業前)	4.43±1.95	7.00±0.00	F(1,41)=5.13*
VII (授業前)	4.75±1.86	6.67±0.58	F(1,41)=3.09
死生観尺度 I (授業後)	6.00±1.35	6.00±1.00	F(1,48)=0.00
II (授業後)	4.57±1.65	6.00±1.00	F(1,48)=2.16
III (授業後)	3.79±1.84	5.00±2.00	F(1,48)=1.22
IV (授業後)	2.47±1.44	1.33±0.58	F(1,48)=1.81
V (授業後)	3.98±1.50	3.67±2.52	F(1,47)=0.11
VI (授業後)	4.80±2.00	3.67±1.16	F(1,41)=0.95
VII (授業後)	5.03±1.49	5.00±1.46	F(1,41)=0.16

* p<0.05

(3) 看取り体験の有無と死に対する態度・死生観尺度との関連

	看取り体験 有(平均値±SD)	(N=48) 無(平均値±SD)	F値
死に対する態度 授業前	2.58±0.57	2.61±0.46	F(1,46)=0.05
授業後	2.97±0.49	3.00±0.48	F(1,46)=0.38
死生観尺度 I (授業前)	5.33±1.71	5.39±1.48	F(1,47)=0.01
II (授業前)	5.61±1.82	5.19±1.69	F(1,48)=0.68
III (授業前)	3.39±2.20	3.25±1.78	F(1,48)=0.06
IV (授業前)	2.44±1.65	2.56±1.43	F(1,48)=0.07
V (授業前)	3.94±2.07	3.59±1.52	F(1,48)=0.47
VI (授業前)	5.21±1.80	4.31±2.04	F(1,41)=2.00
VII (授業前)	4.14±2.45	5.24±1.43	F(1,41)=3.46
死生観尺度 I (授業後)	5.67±1.65	6.19±1.09	F(1,48)=1.81
II (授業後)	5.28±1.23	4.31±1.77	F(1,48)=4.21*
III (授業後)	4.00±1.82	3.78±1.90	F(1,48)=0.16
IV (授業後)	2.50±1.54	2.34±1.38	F(1,48)=0.14
V (授業後)	4.29±1.26	3.78±1.66	F(1,47)=1.24
VI (授業後)	5.43±1.74	4.38±2.00	F(1,41)=2.88
VII (授業後)	5.14±1.35	4.93±1.53	F(1,41)=0.19

* p<0.05

尺度との関連

表4-(1)に示すように、死に対する態度は死別体験の有無では授業前後とも有意差はなかった。死生観尺度に関しては授業前でIV死からの回避において「死別体験無」群が有意に高かった。それ以外の項目では有意差はでなかった。

(2) 葬儀参列体験の有無と死に対する態度・死生観尺度との関連

表4-(2)に示すように、死に対する態度は死別体験の有無では授業前後とも有意差はなかった。死生観尺度に関しては授業前でVI死への関心において「葬儀参列体験無」群が有意に高かった。それ以外の項目では有意差はでなかった。

(3) 看取り体験の有無と死に対する態度・死生観尺度との関連

表4-(3)に示すように、死に対する態度は死別体験の有無では授業前後とも有意差はなかった。死生観尺度に関しては授業後でII死への恐怖・不安において「看取り体験有」群が有意に高かった。それ以外の項目では有意差はでなかった。

IV. 考 察

本研究では、ターミナルケアの授業を通して学生の死生観の変化を明確にし、死生観形成についての授業のあり方を模索した。

1. 授業前後の学習効果について

学生の属性において死別体験、葬儀参列の体験が8～9割あり体験率は高いと言えた。死別体験の割合は豊田が示したもの⁶⁾と同様であるが、看取り体験は1割弱で少なくその大部分は祖父母が占めていた。

死に対する態度においては、授業前後の平均点は、2.6から3.0に変化した。3.0以上が死

を肯定的に捉えていることを意味しているという定義やその平均点が授業前後において授業後が有意に高かったことからすれば授業後は死を肯定的に考えられるようになったと言える。3.0以上の人数が授業前後で11人から27人に増加したことは約2.5倍の学生が死を肯定的に考えられるようになったと言えるが、授業後においても21人の学生が死を肯定的には考えられるようにはなっていなかった。これらの学生に対しては、学生が自ら学べるような助言が必要と考える。

臨老式死生観においては、授業前後の平均点は、II. 死への恐怖・不安、IV. 死からの回避が授業後に得点が低かったが、他の5項目は授業後に得点が高かった。このことは、II・IVの定義からすれば、授業後が死について恐怖・不安が軽減し、避けないという傾向であり死に対してポジティブになったと言える。また、IIは授業後が有意に低かったことは、授業により死を生と対比するものではなくその人らしく生きることが、その人らしく死ぬことであるというように死を生の延長線と考えられるようになったと言える。I. 死後の世界観では、授業後がより死後の世界を信じる傾向にあった。麻野は人の死を生物学的な死であると同時に精神的・宗教的な死としての意味合いと強く捉えており、死は人生の終わりでありながらも「終末」「無になること」でなく通過点として捉えている傾向にある⁷⁾と言っている。授業の中においては、チャプレンの方の講演があり、死後の世界について事例を交えて話されたことなどが学生には印象深く、死後の世界のイメージが授業前より豊かになったのではないかと考えられる。V. 人生における目的意識については、授業後が有意に高かった。これは、麻野が言うよ

うに研究の対象が青年期にあり、アイデンティティが確立され生きる目標が明確になってくる時期にあることで、人生に積極的な姿勢を示しているものと考えられる⁸⁾。

死のイメージについては、授業前後の平均点において17項目中「軽々しい・重々しい」と「消極的・積極的」の2項目が授業前に高かったが、それ以外の15項目は授業後に得点が高かった。これは、授業前には、「重々しい」と感じていたが授業において重症なターミナル期のがん患者のビデオなどを聴取し、現実の患者様の日常生活の経過を鮮明に捉えられたことにより「死」が身近に感じられ授業後には、「軽々しい」と感じるようになったのではないかと考える。他の15項目においては授業後の得点が高かったことにより、死について授業前はマイナスイメージをもっていましたが授業を通してプラスイメージに変化したと言える。その中「冷たい・暖かい」「終わり・始まり」「苦しい・安楽」「不安・安心」「暗い・明るい」「悲しい・嬉しい」「絶望・希望」「沈んだ・うきうきした」の項目で授業後が有意に高かったことより授業が有効性であったと考えられる。豊田らは看護学校入学後に死についての考え方やイメージに影響を及ぼした出来事は、1年生では基礎看護学講義、2年生では成人看護学講義、3年生では成人看護学実習であった。また、イメージがどのように変化したかについては、「改めて苦しい・怖い」「苦しい・怖い」といったイメージから「安らぎ」といったイメージに変わったとした者が、どの学年でも多くを占めた⁹⁾と述べている。このことは、学生の入学後の講義・実習が死生観の形成について有効であるとしたものであり、そのことによりマイナスイメージよりプラスイメージに変化していると言え

る。

今回の調査においても、大学の授業が死生観の形成に大きな意味を持ち、そのことによって死を肯定的に考えられるようになったと言える。

2. 基本属性と各尺度との関連

死生観に影響を及ぼす要因として、死別体験の有無・葬儀参列体験の有無・看取り体験の有無と各尺度との関連について考えてみた。結果は、一部を除いてほとんど影響はみられなかった。このことから看護学生の死生観を形成する上でこれらの体験は大きな影響を及ぼしていないと考えられる。死生観の形成には他者の死との出会いが重要である¹⁰⁻¹¹⁾と言われているが、本研究では、有意差はみられず、麻野らと同様の結果であった¹²⁻¹³⁾。学生の死別、葬儀、看取り体験は祖父母が大部分であり、身近な人との体験が自分の死生観の育成とは結びつかなかったと言える。

3. 授業のあり方について

今回、授業前後の比較において死への態度・死生観尺度・死のイメージにおいて授業後が有意に高かったことから授業を受講することにより、死を肯定的に考え死生観が育成されつつあると考える。丹下は直接的に他者の死を経験することのみが死生観を決定するわけではなく、間接的な死の経験を通してであっても死生観は形成される¹⁴⁾と述べている。授業は、単なる知識・技術を教授するのではなく、学生自身が死について主体的にかかわれるようにがんのターミナル期の事例を用いて患者・家族の心身・社会的な理解を求め、そのことをグループ学習するという演習を実施した。このことは、間接的な死の経験を得ることであり、死生観の形成に対して意義があったと考える。看護学生の死生観の研究において古

屋は、学生は自己表出の手段とその機会を得さえすれば互いの死生観を語り、共有することで多くの価値観や考え方を学ぶことができる¹⁵⁾と言っている。森本も死について考える機会を持つこと、その中で学生が生と死をとともに考え・気づき・学ぶことが今後の生と死の教育において重要である¹⁶⁾と述べている。授業により学生は生や死について語り合うという体験が得られ学びを深めたといえる。

つまり、死生観の形成には直接的な死別体験の有無ではなく、生や死について真剣に討議することが教育として重要であると言える。このことは、学生の死生観形成のためには死の準備教育が必要であることを示している。デーケン¹⁷⁾はライフサイクルからみた死への準備教育を示唆し、中高生に対しては文学や哲学を通じて問題に取り組むことの重要性を述べている。さらに、医療従事者に対しては、死に対する成熟した態度を身につけるために死への準備教育は必修である¹⁷⁾と言っている。今回の授業は、学生が死生観を身につける準備教育の一環と言うことができると考える。

また、豊田らは学生の自発的・主体的な学習活動を進めていくために学生の興味・関心や学習段階に応じた教材を選択しなければならない¹⁸⁾と述べている。授業のプログラムは、宗教関係者や医療の現場に従事している医師・看護師による患者様の状態、それに対するケアの現実や患者様の生の声による講義で構成されていた。このことは、実際の患者様に対して看護の経験が少ない学生にとってはよりイメージされやすく死を現実のものとしてとらえ、死生観を形成するために適した教材であったと考える。しかし、落合は文学・哲学の作品に触れることは自己の死生観に大きな影響を及ぼす。読書による自己の死生観確立

の影響について思考し、教材として文学作品がもつ大きな可能性を見出した¹⁹⁾と述べている。このことは、感性を豊かにする上で文学作品は教材としては意味深いと言える。これらのことより、授業においてはさらなる教材の選択が重要であり、そのねらいを明確にし、学生が主体的に学ぶ機会を豊富にすることが必要であり、今回の検討を踏まえ内容の充実を図りたいと考える。今回は、ターミナルケアの授業前後で分析をした。今後、学生が実習中に患者様の死を体験した場合は生・死のあり方やその患者・家族の看護について思考するプロセスを踏まえさせることも死生観の形成には有効と思われる。奥出は学生が、実際に対象別実習で患者の死を経験する中で、他人事のように考えていた3人称の死から身近なこととして死を考えられるようになってきていた²⁰⁾と述べている。実習中の患者様の死の体験をどのように取り上げ、学生の死生観の形成につなげるかは今後の課題である。また、丹下は、自己および生に対して肯定的であるほど死に対しても肯定的である²¹⁾と言っているが、今回は学生の心理面の成長度は検討していないため、今後の研究では自我発達および自己受容度と死に対する態度の側面の関係性の検討が必要と思われる。

V. まとめ

以上より、今回の研究の現状と今後の課題は次のように整理できる。

1. 各尺度の授業前後の比較では授業後が有意に高かったことから、授業は学生の死生観が肯定的に変化することに大きな意義をもっていたと考えられた。
2. 死別体験・葬儀参列体験・看取り体験と各尺度との有意差は一部を除いてなかった。

3. 授業は、専門の講師からの講義や学生が自ら死について考えられるような教材であったが、授業後においても死を否定的に考える学生もいるので今後の検討の必要性が示唆された。

VI. 謝 辞

本研究にあたり、ご協力いただいた学生の皆様に心から感謝いたします。

VII. 参考文献

- 1) 池田恵観：臓器移植に関する日本人の意識構造（第1報）－死生観を構成する背景因子について－，民族衛生，64(3)：161－182，1998
- 2) 山本俊一：死生学のすすめ，29－32，医学書院，東京，1992
- 3) 岡本双美子，石井京子：看護師の死生観尺度作成と尺度に影響を及ぼす要因，日本看護研究学会雑誌，28(4)：53－60，2005
- 4) 豊田妙子，斉藤好子：看護学生の死に対する認識変化の要因，三重看護学誌，3(1)：147－154，2000
- 5) 平井 啓，坂口幸弘ら：死生観に関する研究－死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証，死の臨床，23(1)：71－76，2000
- 6) 前掲書4)
- 7) 麻野幸子，尾崎フサ子：看護学生の死生観，第36回日本看護学会収録（看護総合），502－504，2005
- 8) 前掲書7)
- 9) 前掲書4)
- 10) 前掲書2)
- 11) 糸数陽子：死生観形成に関する調査－看護学生と大学生の比較－，京都市立看護短期大学紀要，30：146－147，2005
- 12) 前掲書7)
- 13) 水谷成子：死生観形成過程にある看護学生のコーピング行動の比較，看護展望，22(1)，76－81，1997
- 14) 丹下智香子：死生観の展開，名古屋大学教育学部紀要，42：149－156，1995
- 15) 古屋洋子：看護学生の死生観，山梨県立看護大学短期大学部紀要，9(1)：115－129，2004
- 16) 森本明子，宮松直美：大学4年次生における看護学生と一般女子学生の死生観に関する研究，第36回日本看護学会収録（成人看護Ⅱ），297－299，2005
- 17) アルフォンス・デーケン：死への準備教育第1巻 死を教える：1－62，メジカルフレンド社，東京，1986
- 18) 前掲書4)
- 19) 落合清子，長井美佐子：看護学生の「死のイメージ」の変化～読書による死生観確立への影響について～，聖隷クリストファー大学紀要，27：7－13，2004
- 20) 奥出有香子：看護学生の対象別実習前後における死に対する意識の変化，順天堂医療短期大学紀要，12：86－93，2001
- 21) 丹下智香子：青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討，心理学研究，70(4)：327－332，1999

View of Death in Students Who Completed the Course on Terminal Care

Mariko Sonoda, Mituyo Uehara

Department of Nursing, Faculty of Nursing and Nutrition,
Kagoshima Immaculate Heart University

Key Words : nursing students, view of death, terminal care
nursing education

Abstract

This study was conducted to determine changes in students' view of death after they have completed the course on terminal care for third year nursing students, so as to help us decide on how the course should be taught in the future. Fifty students were surveyed before and after the course in April and July of 2006.

The study revealed the followings.

- 1) As high as between 80 and 90% of the students have had death in their family or attended a funeral.
- 2) The semantic differential scales on attitude toward death, view of death, and image of death were significantly higher after students completed the course, suggesting the lectures played an important role in the positive change on students' view of life-and-death.
- 3) The relevance of the experience of bereavement, funeral attendance, or seeing someone die on these scales was largely insignificant, indicating these experiences do not have any great influence on how a nursing student developed his or her view on death.
- 4) The course consisted of lectures by instructors specialized in this field and discussions among students about their own thoughts on death. The fact that some students still thought about death negatively after completing the course suggests that the contents of the course work should be reevaluated.

The surveys revealed that the course on terminal care had a great impact on helping the students to develop a positive view on death. Nevertheless, the fact that some students continued to think of death negatively suggested there is still a need to reevaluate how the course has been taught.
